

# 87 大ドツケから峠ノ尾根

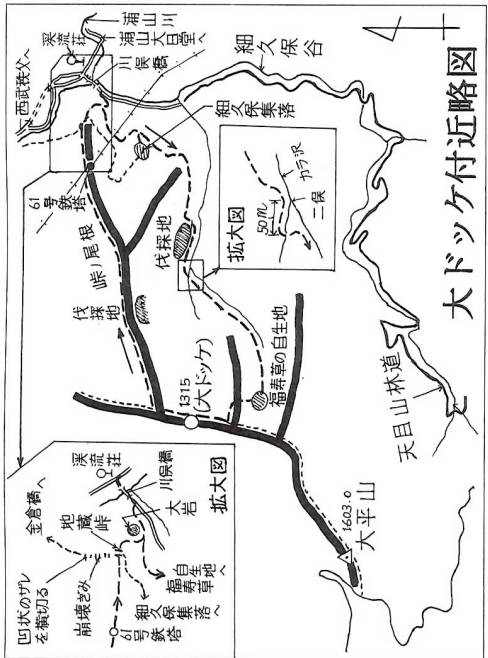
☆☆

〔地図〕東京(20万) 武蔵日原(2万5千)

福寿草は縁起のよい名前であり、花の少ない早春に咲くので珍重される。福寿草が自生する花園を知ったのは、『新ハイキング』(425号)の丹下幸枝氏の紀行であり、その後、『山の本』や『山と溪谷』にも紹介された。当時、私も『新ハイキング』を参考に訪れたが、このたび17年ぶりに、細久保谷の支流、カラ沢の源頭部を埋め尽くす福寿草に再会した。春を迎えたという実感がこみ上げたが、その足で大ドツケに向かうと稜線には雪が残っており、標高がわずかに違っただけで同じ山に二つの季節が併存していた。下山路の峠ノ尾根は、尾根の下部にお地蔵様を祭った地藏峠があるため、そのように呼ばれている。

西武秩父駅人口バス停からバスに乗り、溪流荘バス停の手前で降りる。細久保谷が浦山川に合流する所であり、「細久保谷に至る」や「天目山林道入り口」の道標があり、川俣橋には「熊出没注意」の看板もある。橋の20分先で右前方の道に入るが、入り口には「新秩父線61号に至る」のポールがある。堰堤の手

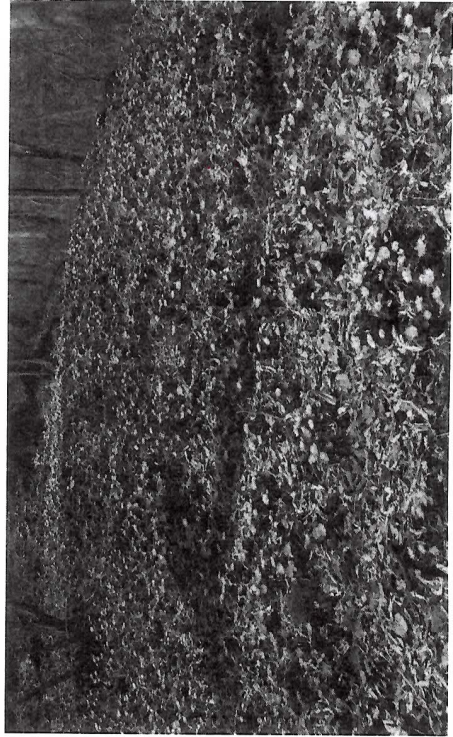
伐採地が終わりに近づくと左前方に下りて沢の二俣に立ち、右沢沿いに50分進んで沢を渡って支尾根を乗越して左沢に出る。この付近は要所の赤布が目印になる。これから先は南西に延びる左沢を詰めればよい。黄金の花園に再会できることを想像するだけで胸は弾み、小鳥のさえずりにも下手な口笛でエールを交換する。860分付近で水流は消え、石ゴロの沢身になる。沢は徐々に



に右に曲がり、沢幅は狭まり傾斜は増し、石も岩むすようになる。再び沢幅が広がると頭上が明るくなり、空は青く、シオジなどの透眸木も伸びやかになる。前方に福寿草の大群落が広がり、太陽の光を浴びて極上の黄金色を輝せてい

前を右後方に折り返し、「(右)61号に至る」の標柱を見送るが、峠ノ尾根の下りルートはこの場所に出る。

送電線の下をくぐり、植林のよく踏まれた道を行き、所々でシグザグを切る。右上へ分ける山道は細久保集落に通じている。北東に大持山西尾根が目に入り、仮小屋を過ぎて次に廃屋の脇を通るが、これは地形図の破線がときれた先にある建物記号である。進路を南に変えると伐採地の斜面が広がり、南東に延びる支尾根を横切る。仮小屋を抜けて路肩が崩壊きみの所を通過する。



大ドツケの福寿草

る。これまでとは全く違った別世界が出現するが、満を持しての演出は心憎い。花園は、私たちハイカーだけのものでなく、国民共有の貴重な宝物である。距離を置き、心して観賞してほしい。大ドツケへは沢の右寄りから、踏み跡をたどって支尾根

に乗り、笹藪の下道を拾って1360分圏の北寄りに入る。尾根筋には雪が寒々と積もっている。ササが雪の重みで曲がり、それが跳ね返る。大ドツケは、一般に1315分点とされているが大平山方面、川俣毛附と書かれた



お地藏様を祭った地藏峠